

源氏物語

夕霧二卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫

源氏物語

夕霧二

紫式部

與謝野晶子訳

歸りこし都の家に音無しの滝はおちね

ど涙流るる

(晶子)

恋しさのおさえられない大将はまたも小野^{おの}の山莊に宮をお訪^{たず}ねしよ
うとした。四十九日の忌^{いみ}も過ぎてから静かに事の運ぶようにするの
がよいのであるとも知っているのであるが、それまでにまだあまりに

時日があり過ぎる、もう噂うわさを恐れる必要もない、この際はどの男性でも取る方法で進みさえすれば成り立ってしまう結合であろうとこんな気になっているのであるから、夫人の嫉妬しつとも眼中に置かなかった。宮のお心はまだ自分へ傾くことはなくても、「一夜ばかりの」といって長い契りを望んだ御息所の手紙が自分の所にある以上は、もうこの運命からお脱しになることはできないはずであると恃たのむところがあつた。九月の十幾日であつて、野山の色はあさはかな人間をさえもしみじみと悲しませているころであつた。山おろしに木の葉も峰の葛くずの葉も争つて立てる音の中から、僧の念仏の声だけが聞こえる山莊しかの内には人げも少なく、蕭条しょうじょうとした庭の垣かきのすぐ外には鹿しかが出て来たりして、山の田に百姓の鳴らす鳴子なるこの音にも逃げずに、黄になつた稲の中

で啼く声にも愁いがあるようであつた。滝の水は物思いをする人に威嚇いかにを与えるようにもとどろいていた。叢くさむらの中の虫だけが鳴き弱つた音で悲しみを訴えている。枯れた草の中から竜胆りんどうが悠長に出て咲いてゐるのが寒そうであることなども皆このごろの景色けしきとして珍しくはないのであるが、折おりと所とが人を寂しがらせ、悲しがらせるのであつた。

夕霧は例の西の妻戸の前で中へものを言い入れたのであるが、そのまま立つて物思わしそうにあたりをながめていた。柔らかな氣のする程度に着馴ならした直衣のうしの下に濃い紫のきれいな擣目うちめの服が重なつて、もう光の弱つた夕日が無遠慮にさしてくるのを、まぶしそうに、そしてわざとらしくなく扇をかざして避けている手つきは女にこれだけの美しさがあればよいと思われるほどで、それでさえこうはゆかぬもの

をなどと思つて女房たちはのぞいていた。寂しい人たちにとってはよい慰安になるであらうと思われる美しい様子で、特に名ざして少将を呼び出した。狭い縁側ではあるが、他の女がまたその後ろに聞いているかもしれない不安があるために、声高には話しえない大将であつた。

「もう少し近くへ寄つてください。好意を持ってくれませんか、この遠方へまで御訪問して来る私の誠意を認めてくださったら、最も親密なお取り扱いがあつてしかるべきだと思いますよ。霧がとても深くおりてきますよ」

と言つて、ちよつと山のほうをながめてから大将がぜひもつと近くへ来てくれと言うので、余儀なく鈍色にびの几帳きちようを簾すだれから少し押し出すほどにして、裾すそを細く巻くようにした少将は近くへ身を置いた。この人

は^{やまとのかみ}大和守の妹で、御息所^{みやすどころ}の姪^{めい}であるというほかにも、子供の時から御息所のそばで世話になっていた人であつたから喪服の色は濃かつた。黒を重ねた上に黒の^{こうちぎ}小桂を着ていた。

「御息所のお亡^{かく}れになつたのを悲しむことと宮様のいつまでも御冷淡であらせられるのをお恨みするのが私の心の全部になつて、ほかのことは頭にありませんから、だれからも私は怪しまれてしかたがありません。もう私に忍耐の力というものがなくなりましたよ」

これを初めにして、夕霧はいろいろと恋の苦しみを訴えた。御息所の最後の手紙に書かれてあつたことも言つて非常に泣く。少将もまして非常に泣く。

「その時のことでございますがね、あなた様がおいでにならぬばかり

か、御自身のお返事もおもらいになれないまままで暗くなってまいりますのに悲観をあそばしましてとうとう意識をお失いになりましたのに物怪もののけがつけこんで、そのまま蘇生そせいがおできにならなかったのだと私は拝見いたしました。以前の御不幸のございました時にも、もうそんなふうにおなりになるのではないかと私どもがお案じいたしましたようなことがおりおりございましたが、宮様がお悲しみになってめいっておいであそばすのをおなだめになりたいとお思になるお心の強さから、御健康をお持ち直しになったのでございます。あなた様についてぼうぜんの御息所のこのお悲しみ方を宮様はただ呆然として見ておいでになりました」

あきらめられぬようにこんなことを少将は言っていて、まだ頭はか

なり混乱しているふうであつた。

「そうではあつても、宮様はもう常態にお復しになつてしかるべきだ
と思う。私に対してあまりな知らず顔をお作りになるのは、思いやり
のないことではありませんか。もつたいないことですが、孤独におな
りになつた宮様にだれがお力になるとお思になるのだろう。法皇様
はいつさい塵界じんかいと交渉を絶つておいでになる御生活ぶりですから、御
相談事などは申し上げられないでしょう。あなたがたが熱心になつて
宮様の私に対する御冷酷さをお改めになるようによくお話し申し上げ
てください。皆宿命があつて、一生孤独でいようとあそばしても、そ
うなつて行かないということもお話し申すといい。人生が望みどおり
に皆なるものであれば、この悲しい死別はなされなくてもよかつたわ

けではありませんか」

などと夕霧は多く言うのであるが、少将は返事もできずに歎息ばかりしていた。鹿がひどく啼くの聞いていて、「われ劣らめや」（秋なれば山とよむまで啼く鹿にわれ劣らめや独り寝る夜は）と吐息をついたあとで、

里遠み小野の篠原分けて来てわれもしかこそ声も惜しまね

と大将が言うと、

ふぢ衣露けき秋の山人は鹿のなく音に音をぞ添へつる

少将のこの返歌はよろしくもないが、低く忍んで言う声こわづかいなどを優美に感じる夕霧であつた。宮へいろいろとお取り次ぎもさせたが、

「この悲しみの中から自分を取りもどす日がございましたら、始終お心にかけてお尋ねくださいますお礼も申し上げられるかと思ひます」

と礼儀としてだけのことより宮からはお返辞がない。大將は失望して歎なげきながら歸つて行くのであつた。途中も車の中から身にしむ秋の終わりがたの空をながめていると、十三日の月が出て暗い気持ちなどにはふさわしくないはなやかな光を地上に投げかけた。それにも誘われて一条の宮の前で車をしばらくとどめさせた。以前よりもまた荒れた氣のするお邸やしきであつた。南側の土塀どべいのくずれた所から中をのぞく

と、大きな建物の戸は皆おろされてあつて人影も見えない。月だけが前の流れに浮かんでいるのを見て、かしわぎ柏木がよくここで音楽の遊びなどをしたその当時のことが思い出された。

見し人の影すみはてぬ池水にひとり宿守る秋の夜の月

こう口ずさみながら家へ帰って来た大将は、そのまま縁に近い座敷で月にながめ入りながら恋人の冷たさばかりを歎いていた。

「あんなふうにしていらっしやることは以前になかったことですね。およしになればいいのに」

と言って女房らはそし譏った。夫人は痛切に良人のこの変わりようを悲

しんでいた。これは心がほかへ飛んで行っているという状態なのであろう、そうしたことに馴ならされた六条院の夫人たちを何かといえぱよい例に引いて、自分をがさつな、思いやりのない女のように言う良人は無理である、自分も結婚した初めからそう馴らされて来たのであつたなら、穏健なあきらめができていて、こんな時の辛抱しんぼうもしよいに違いない、珍しく忠実な良人を持つ妻として親兄弟をはじめとして世間からあやかり者のように言われて来た自分が、最後にみじめな捨てられた女になるのである。夜も明けがた近くなるのであるが、夫婦はどちらも離れた気持ちで身をそむけたまま何を言おうともしなかった。

起きるとまたすぐに、朝霧の晴れ間も待たれぬようにして大将は山

莊への手紙に筆を取っていた。不愉快に思いながらも夫人はもういつかのように奪おうとはしなかった。書いてしばらくそれをながめながら読んで見ているのが、低い声ではあったが、一部だけは夫人の耳にもはいつて来た。

いつとかは驚かすべきあけぬ夜の夢さめてとか言ひし一言

「上よりおつる」（いかにしていかによからん小野山の上よりおつる音無しの滝）と書かれたものらしい。巻いて上包みをしたあとでも「いかによからん」などと夕霧は口にしていた。侍を呼んで手紙の使いはすぐに小野へ出された。内容の全部はよくわからなかったが、返

事だけは手に入れて読みたいものである、それによって真相が明らかになるであろうと夫人は思っていた。

朝おそくなつてから小野の返事が来た。濃い紫色の、堅苦しい紙へ例の少将が書いたものであった。今日もまた自分たちの力で宮をお動かしかしることのできなかつたことが書かれてあつて、

お気の毒に存じますものですから、あなた様のお手紙へむだ書きをあそばしたのを盗んでまいりました。

と書いて、中へその所だけを破つたのが入れてあつた。読んでだけはもらえたのであるということであれしくなる大将の心もみじめなものである。むだ書きふうにお書きになつたお歌は、骨を折って読んでもみると、

朝夕に泣く音を立つる小野山はたえぬ涙や音無しの滝

と解すべきものらしい。また寂しいお心に合いそうな古歌などの書かれてある宮のお字は美しかった。他人のことで、こんなことを夢中になるまでの関心をもつて楽しんだり、悲しんだりしているのを、齒がゆく病的なことに思っていたが、自分のことになるかと恋する心は堪えがたいものである、どうしてこうまでになったのかと反省をしようとするのであるが、それもできないことであつた。

六条院も大将の恋愛問題をお聞きになつて、この人がなんらの浮いたこともせず、批難のしようもない堅実な人物であることに満足しておいでになつて、御自身の青春時代に好色な評判を多少お取りになつ

た不面目をこの人がつぐなつてくれるもののように思つておいでになつたことが裏切られていくような寂しさをお感じになつた。この事件の気の毒な影響から双方で犠牲を払う結果になるのであらう、全然関係のないところの女性ではなくて、妻の兄の未亡人の宮との問題であるから、舅しゅうとの大臣などもう思ふことであらう、それほどの思慮を持たないのではあるまいが、宿命というものから人はのがれられずに起こつてきたことであらう、ともかくも自分の干渉すべきことでないと院はお考へになつた。結局双方とも婦人の損になることで気の毒であると歎いておいでになるのであつた。御自身の経験されたことに照らして見、また大將のこの現状によつて、亡なきのちの世が不安になつたことを紫夫人にお言いになると女王によおうは顔を赤くして自分があとに残

らねばならぬほど、早くこの世から去っておしまいになる心でおいでになるのであろうかと恨めしく思うふうであつた。

「女ほど窮屈なものはありませんね。心の惹^ひかれることも、恋しい感情も皆おさえて知らぬふうをしておとなしくしていなければならぬのでは生きがいもなし、人生の退屈さと悲哀とを紛らすことができないではありませんか。そうかといって感情に乏しい女になつては無価値だし、どうしてこんなふうに育つたのかと親さえも軽蔑^{けいべつ}したくなりますからね。ただ心でだけ思つて、お坊様が気の毒がる無言太子のようになつて、細かな感情も動きながら黙つていなければならぬ人にするのも無慈悲な親になる。こうであればああであり、それであればこうになる、どうして中庸を得るようになればいいかと、そんなこと

を私が考えるのも、他の女性のためではなく女一によいちの宮を完全な女性にしたいからですよ」

と院は言っておいになった。

夕霧が六条院へ来た時に、実状を知りたく思召おぼしめす心から、院が、

「御息所みやすどころの忌いみがもう済んだだろうね。時はずんずんとたつからね。私が遁世とんせいの望みを持ち始めた時からもう三十年たっている。味気ないことだ。夕べの露にも異ならない命を持って安んじていられるわけはないのだからね。どうかして髪を剃そり落としたいと望みながらのんきなふうを装っている。これはいけないことだね」

こんな話をおしかけになった。

「不幸ばかりで、もうこの世に未練はなかりうと思われまます人でも、

さて遁世はなかなかできないものらしいのでございますから、あなた様などは御無理もございません」

などと言つて、また大將は、

「御息所の四十九日の仏事のことなども大和守^{やまとのかみ}一人の手でやつております。気の毒なことでございます。よい身寄りのない人は自身についた幸福だけで生きている間はよろしゅうございますが、死んだあとになつてみますと気の毒なものです」

とも言つた。

「御息所の仏事は院からもお世話をあそばすだろうよ。女二^{にょに}の宮^{みや}はどんなに悲しんでおいでになることだろう。その当時はよくわからなかったが、近年になつて事に触れて私の見たところではあの御息所は

相当にりっぱな人らしい。院の後宮の才女には違いなかった。そんな人の亡くな^なっていくことは惜しい。生きておればよいと思う人がそんなふうに皆死んでゆくではないか。院もお悲しみになったということだ。あの宮さんはここに来ておられる宮さんに次いで御愛子だったのだよ。きつとごりっぱだろう」

「さあ宮様はどんな方でございますか。御息所は無難な女性と見受けました。そう親密につきあっていたのではございませんが、しかし、何でも無い時に人格の片影は見えるものでございますからね」

などと言って、女二の宮のことを話題にせず大将は素知らぬふうを見せているのである。これほど強い心でしている恋は、親の言葉くらいで思いとどまらせえられるものでない、用いない忠告を賢げに言う

のもおもしろいことではないとお思ひになつて、院は何の勧告をもあそばさなかつた。

大將は御息所の法事をするのにあらゆる尽力をしていた。こんなことはすぐに評判になるもので、太政大臣家へも聞こえていった。不都合な話であると女性の側の悪いようにそこでは言われておいでになる宮がお気の毒である。法事の当日は昔の縁故で大臣家の子息たちも参会した。派手な誦經はで ずきようの寄付が大臣からもあつた。寄付はまだほかからも多く来た。競争的にこうしたことをするのが今日の流行である。

宮はこのまま小野の山莊で遁世とんせいの身になつておしまになる志望が
おありになつたのであるが、御寺みでらの院にこのことをお報じ申し上げた
人があつて、

「そんなことはよろしくない。皆がいろいろな変わった境遇にいることも望ましいことではないが、保護者のない者が尼になったために、かえって浮いた名を立てられることがあったり、俗でいる以上に煩惱を作らなければならぬことができたりしては、この世の幸福も未来の幸福も共に無にしてしまうことになる。自分が僧になつてゐる上に、三の宮が出家をしている。今また二の宮が同じことをしては、子孫の絶えていく一家と見られるのも、世の中を捨てた自分にとってはかまわないことであるが、必ずしもまた今競つて出家は実現するに及ばないことだということは自分にもできる。不幸な時にこの世を捨てることをするのは見苦しいものである。自然に悟りができてくる時節を待つて、冷静に判断をしてしなければならぬことです」

こんな意味のことをたびたび御忠告になった。大将との恋愛事件がお耳にはいつていたのである。大将の愛が十分でないために悲観して尼になったと宮がお言われになることを院はおあやぶみになるのであった。そうとはお思いになっても公然大将の夫人になつておしまいになることを姫宮の完全な幸福とお認めになることもおできにならないのであるが、その問題に触れていつては宮が羞恥しゅううちに堪えられないであらうと思召すとかわいそうなお気持ちおぼしめがして、せめてこの際は自分だけでも知らぬ顔をしていてやりたいと思召した。

大将も立てられる噂うわさに言いわけをしてきたこれまでの態度はもう改めるほうがよい時期になったと思ひ、女二の宮が結婚を御承諾になるのを待つことはせずに、御息所の希望したことであつたからというよ

うに世間へは思わせることにして、この場合はしかたがないから故人にちよつとした責任を負わせることくらい許してもらふことにして、いつから始まつたということをあいまいにして夫婦になろう、今さら恋の涙のありたけを流して、宮のお心を動かそうと努めるのも自分に似合わしくないことであると思つて、山莊を引き上げて一条の邸やしきへお移りになる日をおよそいつということもこちらできめた夕霧は、大和守を呼んで、大将夫人としての宮のお歸りになる儀式等についての設けを命じたのであつた。邸の修理をさせ、勝ち気な御息所が旧態を保たせていたとはいふものの、行き届かない所のあつた家の中を、みがき出したように美しくして、壁代かべしろ、屏風びょうぶ、几帳きちよう、帳台、昼の座席なども最も高雅な、洗練された趣味で製作させるように命じてあつた。

当日は夕霧自身が一条に来ていて、車や前驅の役を勤める人たちを山莊へ迎えに出した。宮はどうしても帰らぬと言っておいでになるのを、女房たちは百方おなだめしていたし、大和守も意見を申し上げた。

「その仰せは承ることができません。お一人きりのお心細い御境遇が悲しく存ぜられまして、御葬送以来ただ今までは、私としてお尽くしいたしうるだけのことはいたしてまいりました。しかし私は地方長官でございますから、お預かりしております国の用がうちやつてはおけませんので、近くまた大和へまいらねばならないのでございます。あなた様のただ今からのお世話をだれに頼んでまいってよいという人もございませんから、どうすればよいかと思っております場合に左大将

が力を入れてくださるのでございますから、あなた様御一身について考えますれば、御再婚をあそばすことをこれが最上のこととは申されませんのでございますが、しかし昔の内親王様がたにもそうした例は幾つもあったことで、御自分の御意志でもなく、運命に従って皆そうおなりになったのでございますから、何もあなた様お一方が世間から批難されるはずもないのでございます。これほどのお方のお志をお退けになりますのは、あまりにも御幼稚なことと申すほかはございません。女性の方でも独立して行けぬことはないと思召すでしょうが、実際問題になりますと、御自身をお護りまもになることと、経済的のこととで御苦労ばかりがどんなに多いかしれません。それよりも十分大事に尊重ごりようじん申される御良人にお助けられになってこそ、あなた様の御天分も

十分に發揮させることができるのでございます。どうかそのお心におなりくださいませ」

大和守はまた、

「あなたたちが宮様へよく御会得えとくのゆくようにお話し申し上げないのが悪いのです。そうかというときまたこうしたことに立ち至る最初の動機などはあなたがたの不注意でお起こしになったりして」

と少将や左近を責めた。

女房が皆集まって来て口々にお促しするのに御反抗がおできにならないで、きれいな色のお召し物などをお着せかえ申したりするままに宮はなっておいでになるのであるが、切り捨ててしまいたく思召すお髪ぐしを後ろから前へ引き寄せてごらんになると、それは六尺ほどの長さ

で、以前よりは少し量が減っていても、他の者の目にはやはりきわめておみごとなものに見えるのであるが、御自身では非常に衰えてしまった、もう結婚などのできる自分ではない、いろいろな不幸にむしばまれた自分なのだからとお思い続けになって、お召しかえになった姿をまたそのまま横たえておしまいになった。

「時間が違ってしまふ。夜がふけてしまふだろう」

などと言って、お供をする人たちは騒いでいた。時雨^{しぐれ}があわただしく山莊を打って、全体の気分が非常に悲しくなった。

上りにし峰の煙に立ちまじり思はぬ方になびかずもがな

とお口ずさみになったとおりに宮は思召すのであるが、そのころは

鍔刀などというものを皆隠して、お手ずから尼におなりになるような

ことのないように女房たちが警戒申し上げていたから、そんなふうにお騒ぎをせずとも、惜しく尊重すべき自分でもないものを、しいて尼になつてみずからを清くしようとも思わず、すればかえつて人の反感をかうにすぎないことも知っているのであるから、と思召して宮は御本意を遂げようともあそばさないのである。女房は皆移転の用意に急いで、お櫛箱^{ぐしばこ}、お手箱、唐櫃^{からびつ}その他のお道具を、それも仮の物であつたから袋くらいに皆詰めてすでに運ばせてしまったから、宮お一人が残つておいでになることもおできにならずに、泣く泣く車へお乗りになりながらも、あたりばかりがおながめられになつて、こちらへおい

でになる時に、御息所が病苦がありながらも、お髪をなでてお繕いして車からお下ろししたことなどをお思い出しになると、涙がお目を暗くばかりした。お護り刀とともに経の箱がお席の脇へ積まれたのを御覧になって、

恋しさの慰めがたき形見にて涙に曇る玉の箱かな

とお歌いあそばされた。黒塗りのをまだお作らせになる間がなく、御息所が始終使っていた螺鈿らでんの箱をそれにしておありになるのである。御息所の容体の悪い時に誦経ずきようの布施として僧へお出しになった品であつたが、形見に見たいからとまたお手もとへお取り返しになつ

たものである。浦島の子のように箱を守ってお帰りになる宮であつた。

一条へお着きになると、ここは悲しい色などはどこにもなく、人が多く来ていて他家のようになっていた。車を寄せてお下りおになろうとする時に、御自邸という気がされない不快な心持ちにおなりになつて、動こうとあそばさないので、あまりに少女らしいことであると言つて女房たちは困っていた。大將は東の対の南のほうの座敷を仮に自身の使う座敷にこしらえて、もう邸やしきの主人のようにしていた。

三条の家では、だれもが、

「急に別なお家うちと別な奥様がおできになつたとはどうしたことでしょう。いつごろから始まつた関係なのでしょう」

と言つて驚いていた。多情な恋愛生活などをしなかつた人は、こうした思いがけぬことを実行してしまうものである。しかしだれも以前からあつた関係をはじめて公表したとと解釈していて、まだ宮の心は結婚に向いていぬことなどを想像する人もない。いずれにもせよ宮の御ために至極お気の毒なことばかりである。

御結婚の最初の日の儀式が精進物のお料理であることは縁起のよろしくなく見えることであつたが、お食事などのことが終わつて、一段落のついた時に、夕霧はこちらへ来て宮の御寢室への案内を、少将にしいた。

「いつまでもお変わりにならぬ長いお志でございますなら、今日明日だけをお待ちくださいませ。もとのお住居へお帰りになりますとまたすまい

お悲しみが新しくなりまして、生きた方のようにでもなく泣き寝におやすみになったのでございます。おなだめいたしましてもかえってお恨みになるのでございますから、私どもその苦痛をいたしたくございません。殿様のことを宮様に申し上げることはできないのでございます」

と少将は言う。

「変なことではないか、聡明な方のように想像していたのに、こんなことでは幼稚なところの抜けぬ方と思うほかはないではないか」

夕霧が自分の考えを言って、宮のためにも、自分のためにも世間の批議を許さぬ用意の十分あることを説くと、

「それはそうでございますが、ただ今ではお命がこのお悲しみで

どうかおなりになるのではないかということだけを私どもは心配いたしておりました、そのほかのことは何も考えられないのでございます。殿様、お願いでございますから、しいて御無理なことはあそばさないでくださいませ」

と少将は手をすり合わせて頼んだ。

「聞いたことも見たこともないお取り扱いだ。過去の一人の男ほどにも愛していただけでない自分が哀れになる。世間へも何の面目があると思う」

失望してこう言う夕霧を見てはさすがに同情心も起こった。

「聞いたことも見たこともないと申しますことは、あなた様のあまりにお早まりになった御用意のことでございますよう。道理はどちらに

あると世間が申すでございましょうか」

と少し少将は笑った。こんなふう**に**強く抵抗をしてみても、今はよその人でなく主人と召使の関係になっ**て**いる相手であるから、拒み続けることはさせ**な**いで、少将をつれて、おおよその見当をつけた宮の御寢室へはいつて行つた。宮はあまりに思いやりのない心であるといめしく思召されて、若々しいしかただと女房たちが言つてもよいという気におなりになつて、内蔵うちぐらの中へ敷き物を一つお敷かせになつて、中から戸に錠をかけてお寝やすみになつた。しかもこうしておられること**も**ただ時間の問題である、こんなふうにも常規を逸してしまつた人は、いつまで自分をこうさせてはおくまいと悲しんでおいでになつた。大將は驚くべき冷酷なお心であると恨めしく思つたが、これほど

の抵抗を受けたからといって、自分の恋は一步もあとへ退くものではない、必ず成功を見る時が来るのであるというこんな自信を持ってこの夜を明かすのであつて、溪^{たに}を隔てて寝るという山鳥の夫婦のような気がした。ようやく明けがたになった。こうして冷淡に扱われた顔を皆に見せることが恥ずかしくて大將は出て行こうとする時に、

「ただ少しだけ戸をおあけください。お話したいことがあるのですから」

としきりに望んだがなんらの反応も見えない。

「うらみわび胸あきがたき冬の夜にまたさしまさる関の岩かど

言いようもない冷たいお心です」

と言つて、それから泣く泣く出て行つた。

大將は六条院へ来て休息をした。花散里夫人が、はなちるさと

「一条の宮様と御結婚なすつたと太政大臣家あたりではお噂うわさしているようですが、ほんとうのことはどんなことなのでしょう」

とおおように尋ねた。御簾みすに几帳きちようを添えて立ててあつたが、横から

優しい継母の顔も見えるのである。

「そんなふううわさに噂もされるでしょう。亡なくなられた御息所みやすどころは、最初私が申し込んだころにはもつてのほかのことのように言われたものです。が、病気がいよいよ悪くなつたころに、ほかに託される人のないのが心細かつたのですか、自分の死後の宮様を御後見するようというよ

うな遺言をされたものですから、初めから好きだった方でもあるのですから、こういうことにしたのですが、それをいろいろに付会した噂もするでしょう。そう騒ぐことでないことを人は問題にしたがりませんね」

と夕霧は笑って、

「ところが御本人はまだ尼になりたいとばかり考えておいでになるのですから、それもそうおさせして、いろいろに続き合った面倒な人たちから悪く言われることもなくしたほうがよいとは思われますが、私としては御息所の遺言を守らねばならぬ責任感があって、ともかくも形だけは私が良人^{おとこ}になつて同棲^{どうせい}することにしたのです。院がこちらへおいでになりました時にもお話のついでにそのとおりに申し上げてお

いてください。堅く通して来ながら、今になって人が批難をするような恋を始めるとはけしからんなどとお言いにならないかと遠慮をしていたのですが、実際恋愛だけは人の忠告にも自身の心にも従えないものなのですからね」

とも忍びやかに言うのだった。

「私は人の作り事かと思って聞いていましたが、そんなことでもあるのですね。世間にはたくさんあることですが、三条の姫君がどう思っているかしやるだろうかとおかわいそうですよ。今まであんなに幸福だったのですから」

「可憐かれんな人のようにお言いになる姫君ですね。がさつな鬼のような女ですよ」

と言つて、また、

「決してそのほうもおろそかになどはいたしませんよ。失礼ですがあなた様御自身の御境遇から御推察なすってください。穏やかにだれへも好意を持つて暮らすのが最後の勝利を得る道ではございませんか。嫉妬しつと深いやかましく言う女に対しては、当座こそ面倒だと思つてこちらでも慎むことになるでしょうが、永久にそうしていられるものではありませんから、ほかに対象を作る日になると、いつそうかれはやかましくなり、こちらは倦怠けんたいと反感をその女から覚えるだけになります。そうしたことで、こちらの南の女王の態度といい、あなた様の善良さといい、皆手本にすべきものだとは私は信じております」

と継母をほめると、夫人は笑つて、

「物の例にお引きになればなるほど、私が愛されていない妻であることが明瞭めいりょうになりますよ。それにしましてもおかしいことは、院は御自身みづかみの多情なお癖はお忘れになったように、少しの恋愛事件をお起こしになるとたいへんなことのようにお訓さとしになろうとしたり、蔭かげでも御心配になったりするのを拝見しますと、賢がる人が自己のことを棚たなに上げているということのような気がしてなりませんよ」

こう花散里夫人が言った。

「そうですよ。始終品行のことで教訓を受けますよ。親の言葉がなくとも私は浮気うわきなことなどをする男でもないのに」

大將は非常におかしいと思うふうであつた。

院のお居間へも来た大將を御覧になって、院は新事実を知っておい

でになったが、知った顔を見せる必要はないとしておいでになって、ただ顔をながめておいでになるのであった。それは非常に美しくて今が男の美の盛りのような夕霧であつた。今問題になっているような恋愛事件をこの人が起こしても、だれも当然のことと認めてしまふに違いないと思召された。鬼神でも罪を許すであろうほどな鮮明な美貌びぼうからは若い光と匂においが散りこばれるようである。感情にまだ多少の欠陥のある青年者でもなく、どこも皆完全に発達したきれいな貴人である。と院は御覧になって、問題の起こるのももつともである。女でいてこの人を愛せずにおられるはずもなく、鏡を見てみずから慢心をせぬわけもなからうとわが子ながらも思いになる院でおありになった。

昼近くなつて大将は三条の家へ歸つたのであつた。家へはいるとも

うすぐに何人もの同じほどの子供たちがそばへまつわりに来た。夫人は帳台の中に寝ていた。大將がそこへ行っても目も見合わせようとしていない。恨めしいのであろう、もつともであると夕霧も知っているのであるが、氣にとめぬふうをして夫人の顔の上にかかった夜着の端をのけると、

「ここをどこ思っておいでになったのですか。私はもう死んでしまいましたよ。平生から私のことを鬼だと言いになりますから、いつそほんとうの鬼になろうと思って」

と夫人は言った。

「あなたの気持ちは鬼以上だけれど、あなたの顔はそうでないから私はきらいになれないだろう」

何一つやましいこともないようにこんな冗談じょうだんを言う良人おつとを夫人は不快に思つて、

「美しい恋をする人たちの中に混じつて生きていられない私ですから、どんな所でも行つてしまいます、もうあなたの念頭になぞ置かれたくない。長くいっしょにいたことすら後悔しているのですから」

と言つて、起き上がった夫人の愛嬌あいきようのある顔が真赤まっかになつていて一種の魅力をもっていた。

「子供らしく始終腹をたてる鬼だから、もう見なれて怖ろおそしい気はしなくなつた。少し恐ろしいところを添えたいね」

と良人が冗談じょうだん事にしてしまおうとするのを、

「何を言っているのですか。おとなしく死んでおしまいなさいよ。私

も死にますよ。いろんなことを聞いているとますますあなたがいやになりますよ。置いて死ねばまたどんなことをなさるかと気がかりだから」

と腹をたてるのであるが、ますます愛嬌の出てくる夫人を夕霧は笑^{えが}顔^おで見ながら、

「近くで見るのがいやになっても、私の噂を無関心には聞かないでしょう。あなたはどんなに二人の宿縁の深いかを知らすために、私を殺して自分も死のうというのですね。二人の葬儀をいっしょにしてもらうというような約束は前にしてあったのだからね」

大將はまだ夫人の嫉妬^{しつと}に取り合わないふうをして、いろいろにすかしたり、なだめたりしていると、若々しく単純な性質の夫人であるか

ら、良人の言葉はいいかげんな言葉であると思いますが、きげん機嫌が直つてゆくのを、哀れに思いながらも、大将の心は一条の宮へ飛んでいた。あちらも意志の強いばかりの女性とはお見えにならぬが、やはり自分との結婚を肯定することはできずに、尼にでもなつておしまになれば、自分の不名誉であると思うと、当分は毎夜あちらに行つていねばならぬとあわただしい気がして、日の暮れていく空をながめても、まだ今日でさえお返事をくださらないではないかと煩悶はんもんされた。昨日から今日へかけて何一つ食べなかった夫人が夕食をとったりしていた。

「昔から私はあなたのために、どれほどの苦勞をしたことだろう。大臣が冷酷な処置をおとりになったから、失恋男とだれにも言われるの

を我慢して、あちこちからある縁談を皆断わって、すべて棄権をしてしまっていたようなことは女だってそうはできないことだと皆言いましてよ。どうしてそんなにしていられただろうと、自分ながら若い時の自重心を認めないではいられないのですからね。今のあなたは私をあくまで憎んでいても、愛すべき人たちが家の中いっぱいにいるのだから、あなた一人の問題ではなくなったような現在に、軽々しい挙動はできないではありませんか。よく見ていてください。どんなに変わらぬ愛を持っている私であるかを、長い将来に見てください。命だけではあなたとさえ引き離されることがあるでしょうがね」

こんな話になって大將は泣き出した。夫人も昔のことを思い出すと、あんなにもして周囲に打ち勝って育ててきた恋から夫婦になつて

いる自分たちではないかと、さすがに宿縁の深さも思われるのであつた。畳み目の消えた衣服を脱ぎ捨てて、ことにきれいなのを幾つも重ね、薰香たきもので袖そでを燻くすべることもして、化粧もよくした良人が出かけて行く姿を、灯ひの明りで見ていると涙が流れてきた。夕霧の脱いだ単衣ひとえの袖を、夫人は自分の座のほうへ引き寄せて、

「馴なるる身を恨みんよりは松島にあまの衣にたちやかへまし

どうしてもこのままでは辛抱しんぼうができない」

と独言ひとりごとするのに夕霧は気づくと、出かける足をとめて、

「ほんとうに困った心ですね。」

松島のあまの濡衣ぬれぎぬ馴れぬとて脱ぎ変へつてふ名を立ためやは」

と言った。急いだからであろうが平凡な歌である。

一条ではまだ前夜のまゝ宮が内蔵くらからお出にならないために、女房たちが、

「こんなふうについてまでもしておいでは、若々しい、もののおわかりにならぬ方だという評判も立ちましょうから、平生の座敷へお帰りになりました、そちらでお心持ちを殿様の御了解なさいますようにお話しあそばせばよろしいではございませんか」

と言うのを、もつともなことに宮もお思いになるのであるが、世間でこれからの御自身がお受けになるそし譏りもつらく、過去のあるところに

その人に好意を持っておいでになった御自身をさえ恨めしく、そんなことから母君を失ったとお考えになると最もいとわしくて、この晩もお逢^あいにはならなかった。

「あまりに、御冷酷過ぎる」

こんな気持ちをいろいろに言って取り次がせて夕霧はいた。女房たちも同情をせずにおられないのであった。

「少しでも普通の人らしい気分が帰ってくる時まで、忘れずにいてくだすったならとおっしゃるのでございます。母君の喪中だけはほかのことをいっさい思わずに謹慎して暮らしたいという思召しが濃厚でありあそばす一方では、知らぬ者がないほどにあなた様が世間へ知れましたのを残念がっておいでになるのでございます」

「私の愛は噂うわさとか何とかいうものに左右されない絶大なものなのだがね。そんなことが理解していただけないとは苦しいものだ」

と大将は歎息して、

「普通にお居間のほうへおいでになれば、物越しで私の心持ちをお話しするだけにとどめて、それ以上のことはまだいつまでも待っていていいのです」

同じようなことをまた取り次がせるのであったが、

「弱いものがこんなに悲しみに疲れております際に、いろいろなことをおっしゃるのが非常にお恨めしく思われるのでございます。人が見てどう私が思われることでしよう。その一部は私の不幸なせいでもあるでしょうが、あなた様がお一人ぎめをあそばしたからだとか

れを思います」

とまた御抗弁になった。まだ親しもうとあそばすふうはない。そう
は言っても、いつまでも真の夫婦になりえないことは、人の口から世
間へも伝わるであろうから恥ずかしいと、この女房たちに対してさえ
きまり悪く思う大将であつた。

「実際のことは宮様の御意志どおりの関係にとどめるにしても、この
状態はあまりに変則だ。またそうであるからといって、私が断然来な
くなったら、宮様はどういう世評をお取りになるだろう。あまりに人
生を悲観なされ過ぎて、御幼稚な態度をお改めにならないのを私は宮
様のために惜しむ」

などと大将が責めるのに道理があるように少将は思い、また夕霧の

様子には気の毒で見ておられぬところがあつて、女房たちが通つて行く出入り口にしてある内蔵の北の戸から大将を入れた。ひどいことをする恨めしい人たちであると宮は女房をお思いになり、こうしてだれの心も利己的になるのであるから、これ以上のことを女房たちからされないものでもないとお考へになると、その人ら以外に頼む者のない今の御境遇をかえすがえす悲しくお思いになった。男は宮のお心の動かねばならぬようにして多くささやくのであるが、宮はただ恨めしくばかりお思いになつて、この人に親しみを見いだそうとはあそばさない。

「こんなふうにあらん限りの侮蔑ぶべつを加えられております私が非常に恥ずかしくて、あるまじい恋をし始めました初めの自分を後悔いたしま

すが、これは取り返しうるものではありませんし、あなた様のためにももうそれはしてならないことです。ですからもう御自分はどうでもよいという徹底した弱い心におなりなさい。思うことのかなわないうちに身を投げる人があるのですから、私のこの愛情を深い水とお思ひになつて、それへ身を捨てるとお思ひになればよいと思います」

と夕霧は言った。単衣ひとえの着物にお身体からだを包むようにして、ほかへお見せになる強さといつては声を出してお泣きになることよりおできにならないのも、あくまで女らしくお気の毒なのをながめていて、なぜこうであろう、こんなにまで自分をお愛しになることが不可能なのであろうか、どんなに許しがたく思う人といつても、これほどの志を見ているは自然に心のゆるんでくるものであるが、岩や木以上に無情な

ふうをお見せになるのは、前生の約束がそうであるためで、自分に憎^{ぞう}悪^おをお持ちにならねばならぬ運命を持っておいでになるのではなからうかと、こんなことを思つた時から大將はあまりなお扱いに憤りに似た気持ちが起こつて、三条の夫人が今ごろどう思っているかと考えだすと、単純な幼心に思い合つた昔のこと、近年になつて望みがかない、同棲^{どうせい}することのできて以来の信頼し合つた夫婦の情味などが思われて、自身のし始めたことではあるが、この恋が味気なくなつて、もうしいて宮の御機嫌^{きげん}をとろうとも努めずに歎き明かした。こんなみじめなことで来たり出で行つたりすることもきまり悪くこの人は思つて、今日はこちらにとどまっていることにして落ち着いているのかも、宮は反感がお持たれになつて、いよいよといふうをお見せにな

ることが増してくるのを、幼稚なお心の方であると、恨めしく思いながらも哀れに感じていた。蔵くらの中も別段細かなものがたくさん置かれてあるのでなく、香の唐櫃からびつ、お置き棚だななどだけを体裁よくあちこちの隅すみへ置いて、感じよく居間に作って宮はおいでになるのである。中は暗い気のする所へ、出たらしい朝日の光がさして来た時に、夕霧は被かいでおいでになる宮の夜着の端をのけて、乱れたお髪ぐしを手でなで直しなどしながらお顔を少し見た。上品で、あくまで女らしく艶えんなお顔であつた。男は正しく装っている時以上に、部屋の中での柔らかな姿が顔を引き立ててきれいに見えた。柏木かしわぎが普通の風采ふうさいでしかないのにもかかわらず思い上がり切っていて、宮を美人でないと思うふうを時々見せたことを宮は思い出しになると、その当時よりも衰えてしまつ

た自分をこの人は愛し続けることができないであろうとお考えられになつて、恥ずかしくてならぬ気があそばされるのであつた。

宮はなるべく樂觀的にものを考えることにお努めになつてみずから慰めようとしておいでになるのであつた。ただ複雑な關係になつて、あちらへもこちらへも濟まぬわけになることを苦しくお思ひになるのと、おりが母君の喪中であることによつてこうした冷ややかな態度をおとり続けになるのである。

大将の手水ちようずや朝餉あさげの粥かゆが宮のお居間のほうへ運ばれた。この際に喪の色を不吉として、なるべく目につかぬようにこの室の東のほうには屏風びようぶを立て、中央の室へやとの仕切りの所には香染めの几帳きちようを置いて、目に立つ巻き絵物などは避けた沈じんの木製の二段の棚たななどを手ぎわよく配

置してあるのは皆大和守やまとのかみのしたことであった。派手はでな色でない山吹やまぶき色、黒みのある紅、深い紫、青鈍あおにびなどに喪服を着かえさせ、薄紫、青朽葉くちばなどの裳もを目だたせず用いさせた女房たちが大将の給仕をした。今まで婦人がただけのお住居すまいであつて、規律のくずれていたのを引き締めて、少数の侍を巧みに使い不都合のないようにしているのも、皆一人の大和守が利巧りこうな男だからである。こうして思いがけず勢力のある宮の御良人ごりょうじんがおできになったことを聞いて、もとは勤めていなかった家司けいしなどが突然現われて来て事務所に詰め、仕事に取りかかっていた。

実質はともかくも、この家の主人らしい生活を大将が一条で始めて、いる数日間を、三条の夫人はもう捨てられ果てたもののように見て、

これほど愛をことごとく新しい人に移すこともしないであろうと信頼していたのは自分の誤解であつた、忠実であつた良人がほかに恋人のできた時は、愛の痕跡こんせきも残さず変わってしまうものだと言ふのは嘘うそでないと、苦しい体験をはじめとするという氣もしてこの侮辱にじつと堪えていることはできないことであると思つて、父の大臣家へ方角除よけに行くと言つて邸やしきを出て行つた。女御によごが実家に歸っている時でもあつたから、姉君にも逢あつて、悩ましい氣持ちの少し紛らすこともできた雲井くもいの雁夫人かりは、平生のようにすぐ翌日に邸へ歸るようなこともせず父の家の客になつていた。これはすぐに左大将へも聞こえて行つた。そんなことがあるようにも予感されたことである、はげしい性質の人であるからと大将は思つた。大臣もまたりっぱな人物であり

ながら大人らしい寛大さの欠けた性格であるから、一徹に目にものを
見せようとされないものでもない、失敬である、もう絶交するという
ような態度をとられて、家庭の醜態が外へ知られることになってはな
らぬと驚いて、三条へ帰って見ると、子供は半分ほどあとに残されて
いたのであった。姫君たちと幼少な子だけを夫人はつれて行ったので
ある。父を見つけて喜んでまつわりに来る子もあれば、母を恋しがつ
て泣く子もあるのを、大將は心苦しく思った。手紙をたびたびやって
迎えの車を出すが、夫人からは返事もして来なかった。こうして妻に
意地を張られるようなことは、自分らの貴族の間にはないことである
がと、うとましく思いながらも、大臣へ対しての義理を思つて、日の
暮れるのを待つて自身で夕霧は迎えに行つた。

「寢殿にいらっしゃいます」

ということ、平生行つて使っている座敷のほうには女房だけがないた。男の子供たちだけは乳母めのとに添つてここにいた。

「今さら若々しい態度をとるあなたではありませんか。かわいい人たちをあちらこちらへ置きはなしにして、自身は寢殿でお姫様に歸つた氣でいられるあなたの氣持ちは解釈に苦しむ。私への愛情がそんなふうに少ないとは私にもわかつているのですが、昔からあなたにばかり惹ひかれる心を私は持っているし、今ではおおぜいのかawaiiそんな子供ができていますから、二人の結合のゆるむことはないと思つてたのに、ちよつとしたことにこだわつて、こんな扱いを私になさることはいいいことだろうか」

取り次ぎによつて夕霧はこう妻を責めた。

「もうすべてのことがお氣に入らないものになつてしまつたのですから、お困りになる私の性質は今さら直す必要もないと思います。かわいそうな子供たちだけを愛してくださいなればうれしく思います」

と夫人は返事をさせた。

「おとなしい御挨拶だ。あいさつ結局はだれの不名誉になることとお思ひになるのだろう」

と言つて、しいて夫人の出て来ることも求めずに、この晩は一人で寝ることにした。どちらつかずの境遇になつたと思ひながら、子供たちをそばへ寝させて大將は女二にょにの宮みやの御様子も想像するのであつた。どんなにまた煩悶はんもんをしておいでになる夜であらうなどと考えると苦し

くなくて、こんな遣^やる瀬^せない苦しみばかりをせねばならぬ恋というものをなぜおもしろいことに人は思うのであらうと、懲^やりてしまいそうな氣もした。夜が明けた時に、

「こんなことを若夫婦のように言い合っているのも恥ずかしいことですから、だめならだめとあきらめますが、もう一度だけでもどおりになつてほしいという私の希望をいれたらどうですか。三条にいる小さい人たちもかわいそうな顔をして母を恋しがっていました^よが、選^よつて残しておいでになつたのにはそれだけの考^えがあるのでしようから、あなたに愛されない子供達を私の手でどうにか育てましよう」

とまた多少威嚇^{いかく}的なことを夫人へ言つてやつた。一本氣なこの人は自分の生んだ子供たちまでもほかの家へつれて行くかもしれぬという

不安を夫人は覚えた。

「姫君を本邸のほうへ帰してください。顔を見に来ることもこうしたきまりの悪い思いを始終しなければならいことですから、たびたびはようしません。あちらに残っている子供たちも寂しくてかわいそうですから、せめていっしょに置いてやりたいと思います」

とまた大将は言つてよこした。そうしてから小さくてきれいな顔をした姫君たちが父のいる座敷へつれられて来た。夕霧はかわいく思つて女の子たちを見た。

「お母様の言うとおりになつてはいけませんよ。ものの判断のできない女になつては悪いからね」

などと教えていた。

大臣は娘と婿のこの事件を聞いて外聞を悪がっていた。

「しばらく静観をしているべきだった。大将にも考えがあつてしていたことだろうからね。婦人が反抗的に家を出て来るようなことは軽率なことに見られて、かえつて人の同情を失つてしまう。しかしもうそうした態度を取りかけた以上は、すぐに負けて出てはならない。そのうちに先方の誠意のありなしもわかることだから」

と娘に言つて、一条の宮へ蔵人少将くろうじょうを使いにして大臣は手紙をお送りするのであつた。

契ちぎりあれや君を心にとどめおきて哀れと思ひ恨めしと聞く

無関心にはなれませんが因縁があるのでございますね。

この手紙を持って、少将はずんずん宮家へはいつて来た。南の縁側に敷き物を出したが、女房たちは応接に出るのを気づらく思った。まして宮はわびしい気持ちになっておいでになった。この人は兄弟の中で最も風采ふうさいのよい人で、落ち着いた態度で邸やしきの中を見まわしながらも、亡なき兄のことを思い出しているふうであった。

「始終伺っている所のような気になって私はいるのですが、そちらでは親しい者とお認めくださらないかもしれませんね」

などと皮肉を少し言う。大臣への返事をしにくく宮は思召して、
「私にはどうしても書かれない」

こうお言いになると、

「お返事をなさいませんと、あちらでは礼儀のないようにお思いになるでございましょうし、私どもが代わって御挨拶あいさつをいたしておいてよい方でもございませんから」

女房たちが集まって、なおもお書きになることをお促しすると、宮はまずお泣きになって、御息所みやすどころが生きていたなら、どんなに不愉快なことと自分の今日のことを思っても、身に代えて罪は隠してくれるであらうと母君の大きな愛を思い出しながら、お書きになる紙の上には、墨よりも涙のほうが多く伝わって来てお字が続かない。

何故なにゆゑか世に数ならぬ身一つを憂うしとも思ひ悲しとも聞く

と実感のままお書きになり、それだけにして包んでお出しになった。少将は女房たちとしばらく話をしていたが、

「時々伺っている私が、こうした御簾みすの前にお置かれすることは、あまりに哀れですよ。これからあなたはあなたがたを友人と思つて始終まいりますから、お座敷の出入りも許していただければ、今日までの志が酬むくいられた気がするでしょう」

などという言葉を残して蔵人少将は歸つた。

こんなことから宮の御感情はまたまた硬化していくのに対して、夕霧が煩悶はんもんと焦躁しょうそうで夢中になっている間、一方で雲井の雁夫人の苦悶くもんは深まるばかりであつた。こんな噂うわさを聞いている典侍ないしのすけは、自分を許したい存在として嫉妬しつとし続ける夫人にとって今度こそ侮りがたい相手が

出現したではないかと思つて、手紙などは時々送つていたのであつたから、見舞いを書いて出した。

数ならば身に知られまし世の憂^うさを人のためにも濡^ぬらす袖^{そで}かな

失敬なというような氣も夫人はするのであつたが、物の身にしむころで、しかも退屈な中にいてはこれにも哀れは覺えないでもなかつた。

人の世の憂きを哀れと見しかども身に代へんとは思はざりしを

とだけ書かれた返事に、典侍はそれとおりに思うことであろうと同情した。

夫人と結婚のできた以前の青春時代には、この典侍だけを隠れた愛人にして慰められていた大将であつたが、夫人を得てからは来ることもたまさかになつてしまった。さすがに子供の数だけはふえていた。夫人の生んだのは、長男、三男、四男、六男と、長女、二女、四女、五女で、典侍は三女、六女、二男、五男を持っていた。大将の子は皆で十二人であるが、皆よい子で、それぞれの特色を持つて成長していった。典侍の生んだ男の子は顔もよく、才もあつて皆すぐれていて、はなちるさと三女と二男は六条院の花散里夫人が手もとへ引き取つて世話をしていた。その子供たちは院も始終御覧になつて愛しておいになつ

た。それはまったく理想的にいつているわけである。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
